

# 根源的網羅思考の機能

## Function of Radical Thinking for Enumeration

高原 利生 TAKAHARA Toshio

### 1. まえがき

2013年、少なくとも日本では、根拠を失った固定観念と、価値とオブジェクトの粒度が曖昧のままの曖昧な思考、議論が、必要な根本的変革と新しい発見の最大の妨げになっている。

本来、固定観念を見直し続け、複雑さと変化性を扱う有用な形式が矛盾、弁証法であるはずだった。しかし、第一に、従来の矛盾、弁証法は、使い物にならなかった。第二に、矛盾、弁証法の粒度や思考の単位を決める粒度管理方法は存在しなかった。そこで、本来の弁証法の有効性を回復し、矛盾を全ての運動の動的構造とし、変化の型を網羅する根本的変革や、粒度管理のための根源的網羅思考の構築を行ってきた。[TS2010-12][FIT2012-13]

本稿で引き続き、根源的網羅思考とその機能見直しを続ける。

### 2. 準備：基本概念 [FIT2004-05改][TS2012改]

1) オブジェクトは、事実について知覚できるものである。

具体的オブジェクトは、粒度によって事実の全体から切り取られる。**粒度**とは、オブジェクトの空間的・時間的範囲、扱う属性の範囲である。密度はそのオブジェクトのサブオブジェクト群の粒度である。**属性**は、内部構造と(狭義の)属性を持ち、それぞれ値を持つ。(狭義の)属性は、外部に対しては機能となる[TS2007]。

オブジェクトは、直接間接に知覚できる、ものと観念からなる存在と、相互関係=相互作用=運動の二種である。

オブジェクトの集合体である**オブジェクト世界**が、世界の個々の**事実**である現象や判断に対応する。全てのオブジェクト世界の総体に対応する、歴史を含む事実が世界である。

**価値**は、属性の作用である機能のプラスの意味の総体で、事実の歴史の総括によって得られる。通常、無意識に価値に規定されて目的が決まる。[TS2012]

2) 関係と生成、運動を表現する最小モデルを作りたい。あるものとは、そのものの本質の生成と運用の総体である。**矛盾**を、外部との関係を持つ二項の関係の生成と運動とする[FIT2012][TS2012]。最小の近似モデルを考え「二項とその間の運動」の二項の各項の属性数を二以下、属性の値の数も二以下とすると、二項とは、普通、二オブジェクトの**二属性**か、一オブジェクトの**二属性**か、一属性の**二値**である。

この最小運動モデルの機能は限られる。

二の片方が目標、もう片方が現在を表わすか、二の両立を表わすかである。前者は、(狭義の)**差異解消**のための変更の場合であり、変数は一である。後者は、**両立**の場合であり、変数は二である。共有は、両立が同じ属性、値の場合である。

矛盾は、関係と生成、運動を表現するモデルの最小のもので、世界の近似モデルの最小単位となり、関係、生成、運動を扱う論理である**弁証法**論理の単位となる。[FIT2012][TS2012]

### 3. 根源的網羅思考とその機能

変更、解決を行うためには、どの期間の誰のために何を変更するか、つまり、価値とオブジェクトの**粒度**を確定した上で、矛盾の粒度が定めればよい。矛盾は、様々な**粒度**で解ける。しかしどの粒度で解いた解がよいのかは良く分からない。

そこで、粒度を適切に意識的に特定、管理する根源的網羅思考が必要となる。[FIT2012][TS2012]

生き方：  
態度 → ( 粒度特定 ↔ 方法 )

粒度特定、方法を規定するものが態度である。粒度特定、態度は、従来、哲学や思想と呼ばれてきた。ここで方法は弁証法である。

#### 3.1 根源的網羅思考の内容

人の能力は限られており、世界は変化し続けているから、この根源的網羅思考の要件は、価値と事実の、粒度、網羅を疑い続け、見直し続け、その論理的可能性を極限まで追求し続けることによってしか実現できない。

理想的な**根源的網羅思考**は、謙虚にかつ批判的に、事前に、

1) 状況から比較的独立している、粒度、属性、機能、構造などの**基本概念**、オブジェクトの型(種類)、オブジェクト世界の型(特に判断、変更の型)、価値について、粒度、構造を網羅、見直し、変更し続ける。

特に価値については、可能な限り、下記3)の全てを網羅したオブジェクト世界の認識から見えてくる可能になる価値、目的を再設定し続け、それにより、解くべき矛盾と変更オブジェクトの粒度を特定し検討し続ける。

2) あらゆる分野、あらゆる集団が前提としている行為の目標、実現手段、設計と運用の論理、さらにそれらの前提となっている固定的共同観念を、根源的理想的に見直し、変更し続ける。

3) a.オブジェクト世界、オブジェクト、b.今のオブジェクト世界より粒度が大きいまたは小さいオブジェクト世界、c.今と関係するオブジェクト(今関係するオブジェクト、今をもたらしたオブジェクト)、d.追加の新しいオブジェクト、e.それら間の関係について、粒度、構造、属性の網羅、見直しを行い、認識を続ける。

今は、4) 状況に応じ、第一に、今の価値、理想と、できれば3) の全てを網羅したオブジェクト世界の認識との対比を続け、解くべき矛盾と変更オブジェクトの粒度を特定する。第二に、取り敢えず、今の価値、理想と、今のオブジェクト世界との対比を続け、解くべき矛盾と変更オブジェクトの粒度を特定する。

### 3.2 根源的網羅思考の運動の展開と機能

根源的網羅思考は、粒度を特定するだけでなく、論理的網羅を同時に伴ってそれ自体運動し、また他のものとも相互作用して、時間的空間的に次のように運動し展開していく。各段階の粒度特定と網羅の変更が方法として働き、新しい機能がもたらされる。

#### 1) 同じ粒度での網羅による有用さ

同じ粒度での網羅による新しい発見、変更が得られる。

例：[FIT2008-2012] [TS2008-2012]の矛盾の型の網羅は、根源的に運動の種類を網羅、拡張した例である。

例：本稿も [FIT2013]も、根源的網羅思考による。

#### 2) 異なる粒度にまたがる思考サイクルによる有用さ

ある粒度があれば、その粒度での網羅が相互作用の中で行え、次に粒度を変えてさらに網羅を行う。この中で、新しい粒度での網羅による関係の発見、変更が得られる。

例：ダーウィンによる進化の法則の発見。

このサイクルの中で、根源的網羅思考は、人が産まれて以降、次第に物事を認識し学んでいく手段、次第に物事の本質的認識を進めていく手段、新たな発見や価値実現の具体化展開手段になる。[FIT2013]

例：設計は、機能、負の機能、構造の三者が、次第に具体化されていく作業である[ISPJ1994]。

#### 3) 弁証法と根源的網羅思考の相互作用による有用さ

粒度確定後、弁証法による変更または変更の可能性が生じ、それは、他のオブジェクトと相互作用を起こし、さらに、粒度の網羅、確定があり、新たな認識、変更、変更の可能性が生じる。

[FIT2013]

根源的網羅思考の運動の型は、1)2)3)で網羅されている。この中に、特殊なオブジェクトである価値について次の項目がある。

#### 4) 価値と事実の相互作用による質的に新しい価値、目的創造

通常は、無意識に価値に規定されて目標が決まり、現実との差異の解消を行っていく。これと逆に、根源的網羅思考単独の思考サイクルの中で、事実とそれに関係する全てを網羅した認識から努力すれば可能な価値、目的が見えてくる。これが、実用上、最も重要である。

例：iPS細胞の発見、宇宙ソーラーセーリングの実現

例：今後の太陽消滅後の人類を含む生命の消滅という運動を阻止する新しい価値生成の問題。この解決のためには、原子力によるエネルギーリサイクル、もののリサイクルが最低限の条件である。原子力によるエネルギーリサイクル原理は発見されている。もののリサイクルも始まっている。場合によって、廃棄して新しく製品を手に入れるか、運用中の製品をそのまま新しいものに代えながら運用を続けるかに関わらず、新規に入手する材料はない条件で、製品投入、運用の永続を実現しなければならない。これら条件は、今から努力を重ねれば充足可能である。

例：環境負荷ゼロで、生命にとっての価値が増大し続ける持続可能社会を作ること。これは、上の問題のサブ問題である。

例：平和で自由な愛の世界をつくること。

これは、原子力エネルギーリサイクル、もののリサイクルと相互に条件となっている。

## 4. 結論

根源的網羅思考は、それ自体運動し、また他のものとも相互作用して、展開していく。各段階で、粒度特定と網羅の変更が新しい機能がの型をもたらす。特に、事実と網羅した認識から、可能な価値、目的が見えてくることが重要であることを述べた。弁証法と根源的網羅思考が、世界と人の根本的変革を可能にする。

## 参考文献

[RDI] デカルト、「精神指導の規則」野田訳、岩波文庫、規則第3-8.11 pp.17-55. 64-67, 1950(新訳も出ている)、原著 1701.

[NDRDI] 高原「デカルト「精神指導の規則」岩波文庫、野田訳」のAMAZON書評, 2013.

[THPJ] 中川徹、TRIZ ホームページ、<http://www.osaka-gu.ac.jp/php/nakagawa/TRIZ/>  
[FIT2004] 高原, “オブジェクト再考”, FIT2004,2004. [THPJ]内、高原利生論文集『差異解消の理論』(2003-2007) 所収。(引用文献の2003-2007年のものはこれに含まれる)

<http://www.osaka-gu.ac.jp/php/nakagawa/TRIZ/jpapers/2008Papers/TakaharaPapers2003-2007/TakaharaBiblio080323.htm>

[TS2012] 高原, “根源的網羅思考と矛盾”, 第八回 TRIZ シンポジウム, 2012. [THPJ]内、高原利生論文集『差異解消の理論 2』(2008-2012) 所収(引用文献の2008-2012年のものはこれに含まれる)

<http://www.osaka-gu.ac.jp/php/nakagawa/TRIZ/jpapers/2013Papers/TakaharaPapers-2008-2012/TakaharaBiblio-2-130228.htm>

[FIT2012] 高原, “粒度、網羅の管理と関係、運動の管理”, FIT2012,2012. 同上

[FIT2013] 高原, “世界構造の中の方法と粒度についてのノート”, FIT2013, 2013.

[TKHR] 高原 HP, [http://www.geocities.jp/takahara\\_t\\_jeice/](http://www.geocities.jp/takahara_t_jeice/)